

審査員賞

一般文章(手紙・作文)部門

京都府長岡京市

里中 文子

こころより遅れて

父は、八十歳を過ぎてアルツハイマー病を発症した。この病気は、記憶の帯にぼつぼつと穴が空いていく病気である。言葉は、記憶の中から生まれる。父の記憶は、どれほどの蓄積であっただろうか。知識はもとより、五感から得た情報が刻み込まれた記憶を、アルツハイマー病は、降りはじめの雨粒が落ちていくように消していった。

九月のある昼下がり、私は父と並んで庭に置いたベンチに腰を掛けていた。目の前にある山から木の葉をゆする音がし、初秋の風が流れていた。

父は、静かに前を向いていた。視線は少し下の方にあつた。何か考えているように思えた。言葉のかげらを拾い集めようとしていたのかもしれない。それがどれほど難しい事であるのか。絶望の中にいるように感じられた。

私は黙って寄り添いながら、父の体温を感じていた。傍にいるだけでいい。言葉なんか紡げなくても、ただ、傍にいてくれるだけでいい。存在こそが言葉を超えていると思えた。「もう忘れてもいいやん。そんなに覚えておかなあかんこともないし」

と私は言った。少し時間をおいて、

「そっやのう」

と父が応えた。視線が動くことはなかった。

言葉は、こころより遅れて発せられ、言い尽くすことはできない。言葉を失えば、こころは宇宙をさまよう。言葉を失くした人を前にすれば、そのこころはどこにあるのかを、必死で探す。人は、全身で語っている。そこから様々な事を読み取り、それを言葉に変えて伝え合う事ができる。

言葉は、こころを推し量る力で補うことによってはじめて成り立つのではないだろうか。それが、言葉の持つ、豊かで、大きな力なのかもしれない。